



我らがコウくん

Edition2017
(1)

S?kouji

えー、ではまず、改めて、入学おめでとう。諸君。

諸君らは世界で初めて創設された、この魔法学校の栄えある一期生となる。存分誇りにして欲しい。

もちろん私も、熾烈な競争を勝ち抜いた諸君に敬意を表しよう。

ここに至るまで、20を超える適性検査に性格診断、筆記・体力試験、5段階の面接をくぐり抜けてきた諸君は、この日本中から、いわば選ばれし人間と言って差し支えない人材であるだろう。

さて、やはり気になるところの魔法であるが、これは大いにロマンチックなものを想像してもらって構わない。

何？ロマンは捨てた？そりゃまあ君らが現実主義者になるのも分からんではないが、私としては、志した時の夢を持ち続けて欲しいものだな。

何せ有史以来全人類が憧れた魔法を、諸君らは現実に使えるのだから。ああ、その通り。ハリー、なんとかといったかな？あの作品と同じように、詠唱することで、諸君らは自在に様々な現象を引き起こすことが出来るのだよ。楽しみだと思わんかね。

そう、例えば君。魔法が使えたとしたら、何をしてみたい？電子レンジの真似事？えー、実用的ではあるな……。

とまあ様々な分野への応用は期待されているが、とりあえず、当面は実用なんて考えず魔法を発展させることに注力して欲しい。なにせ始まったばかりだから、基礎研究を進めねばならなくてね。詠唱と生起する現象の相関とか。これは実際に諸君らが魔法を使ってみんことにはわからない。我々も期待しているよ。

というわけで早速詠唱の方法についてだが、まず開始言語を発し――。

『ニュートンの遺稿』をもとに、人類は魔術を完成させていた。そして、物語は動き出す。

夏休みと自らの境遇

夏休み返上という素晴らしい荒技を平然とやってのける夏の補習は、どの時代の日本国の人々にとっても、いやなものであることに代わりはないのであらうと俺はつくづく信じている一人である。スポーツだってそうだろう？サッカーなら前半があつて、ハーフタイムがあつて、その後後半があつたり延長戦があつたりするんだ。今日はアディショナルタイム5分だったからハーフタイムは10分ですなんて暴挙認められる訳がない。

照りつける太陽が校舎内を擬似地獄化させ、先日は水道管が壊れて水は一滴たりとも出てこない。セミは相変わらずみんなと鳴き続け、やむ気配はゼロ。あ〜だるい。魔法学校が創設されてから延々バカみたいな額の税金をつぎ込んでいるというのに、なんでこの校舎はガラス張り張りクーラーウハウハ都会のオアシス的近未来スタイリッシュビルディングにはほど遠い考古学的価値追求型鉄筋コンクリート遺跡なんだよ。ちくしょう統教連め。精神論でモノを語る教師なんてまっぴらごめんだって一の。

それにしてもこのオッサンの授業はつまらない。教科書をただひたすらに読んでいるだけだから生徒は離れていくんだよな。まあ、楽は出来るのだが。

ここは、日本国の中で、魔法学を教える学校の中でも並の並に位置した『区立水下小学校』。小学校だし、制服はないだろうなんていうことは無い。魔法学校に於ける小学校は一般中学と同じ位置づけなのだ。かといって義務ではないのだが、まあ、「将来の為に慣れといたらどうだ」みたいな感じなのだろう。

一般的な中学生の様に男子はブレザーと学ラン、女子はブレザーとセーラー服のどれかを選べる toma テキト一だな。制服って言えるのかコレ？

さっきも言った通り、義務ではないので、けっこう皆、自由に服を着ているが、小5くらいで、「ボクは不器用なんだから今のうちから覚えなさい」みたいな親が出てきて、制服を着させらていたというオレからみてなんて不条理なんでしょうと思わせる事をやらかしてくれやがった場合は着ているのだがしかし、女子が、否カワユイ女子が制服を着れば、この時ばかりは鉄筋コンクリ収容所であるこの学校は天国だ！パラダイスだ！ウハウハだ！がしかし、中学生にもなれば反抗期真っ盛りであるということを見落としてはいけないと言うよりは反抗期の方が良いと言う一部の男子を除いてオレとしてはあまりそういう女子は好きではないというか嫌いに近いと思っているのだ。

かといって、そのような女子を好みとする男子が嫌いであると言えは嘘になる。なぜならば、相棒であるあいつは、そんな女子もっと特定すれば、セーラー服をゲームまあどんなカテゴリーに属されるのかと言えは...健全なオレからすれば非常に理解しがたいえっへんに出てきそうな着こなしと雰囲気で登場するようなやつに蹴り飛ばして欲しいなんて言うイかれた感性をお持ちだったりするからだ。

閑話休題。この教室は3年1組。オレは3年5組だが、補習を受けている身なので、この教室でオッサンを目の前にしている訳だ。

そして隣で青年誌を読んでいるのが、相棒のコウだ。同じ教室に居るという事から皆さんも容易に想像出来る事だろう。15歳の同い年でオレと同ランクだ。だからいっしょにつるんでる間に相棒となったというべきかさせられた仲だ。

成績はと言うと下から7番目。激しいセンバツを乗り越えた一期生でこの成績なら後ろ指さされることはないが、いかんせんオレたちは超究極異次元ゆとり世代(Super Ultimate another Dimension YUTORI generation, SUDY)などというその辺の中学生在が考えたようなあられもない呼ばれ方をされてしまうひと味ちがうぬるま湯の二期生であってしまいうわけで、こうなるともはやこの成績はみじんの威厳ももたらさないどころかバカの烙印をお与えくださる大変ありがたくない肩書きになってしまう訳である。

しかし、退屈だ。今は数学の補習中だが、このオッサン宮澤は、一人教科書を読み進めているだけ。只今12時9分、補習終了時刻まで残り一分だ。コウはと言えばかばんに教材を詰め込み、雑誌を丁寧にに入れて、閉め終えたところだ。どんな評価を付けられても知らないぞ。てかコンビなんだからやめて。もうちょっと相棒の成績に配慮して。

「キーンコーンカーンコーン」

「では今日の補修は終わりだ。明日、8月8日は日曜日だから宿題出すぞ。数学の教科書、31ページの問題全部だ。あさってに提出だ。忘れるなよ。では解散」

「ありがとうございました」

コウは礼を言うや否や教室を飛び出して下駄箱一直線。家に帰ればどうせアニメでも見るのか、ゲームでもするのだろう。おい、顔に書いてあるから、すれ違う皆がひいているぞ。とか言いながら追いかけている俺は何なんだろうな。あんな奴と一緒にいないと、特別補習室行きだなんて、神様とやらはこの俺が振り回されるところを見てケラケラと笑っているのだろうな。あ〜クソっ。みじめだ。

コウに追いついた俺は「今日は『魔女巫女』注目の第5話なんだよ。気にならない？」とかほざいているコウを無視してさっさと運動靴に履き替えると、昇降口の外に出ようとした。

その時、

ピリリリィィィー——

凄まじい音量で耳をつんざく鋭い笛の音。げっ、この音は！やめてくれオレはもうさっさと帰って8月に食い込み始めている貴重なフリーダムを謳歌したいというのに！でもオレたちは帰路につかず校庭に出て行く。なんでかって？アディショナルタイムを後半まで食い込ませたくないからだよ。

特別実践演習

ウチの学校には、というよりどこも同じなのかもしれないが夏休みの補習と言う不条理を逃れるための手段が用意されていて、それが特別実践演習とかいう非常に不吉な字面の、ある意味ではコウがよくわからない、たぶんいかがわしい期待を寄せている補習なのだが単に魔法の撃ち合いをやって勝敗を決めるだけの演習である。なんだ結局補習なんじゃないかと思われるかもしれないが、これはなんとクリアすればあとの補習すべて免除で残りの夏休みをどうぞ満喫してくださいという超待遇が待っているのだ。しかしながらうまい話には裏があるのはこの世の条理、クリアできなかった場合は通常補習を更にドンドンという効果音が聞こえてきそうなぐらいの三段増しで追加という、『充実した学生生活』を盾にした理不尽ここに極まれりな逆超待遇不条理が待ち構えている。笛の音が演習のための集合の合図で、今この学校にいる生徒を考えてみると、オレたちが呼び出されたのは明白だった。

照りつける日差しで白くまぶしい校庭に出たオレたちの前には、審判役の教師2人と、同じ年くらいの女子2人が立っていた。1人は...ありやミカだろうな...茶髪のショートカットで体育会系の体にツリ気味の目。真一文字に結んでいた口を、オレたちを見るや否や口角を上げてにやりと笑いやがった。勘違いするかもしれないが、あれは断じて好意ではない。悪魔だ。悪魔の微笑みだ。そしてもう1人は黒の腰近くまでとどく髪と、どんぐり眼に健康そうな肌の色、そして背丈はオレとほぼ同じくらいだからこれが結構スマート。見慣れたミカの相棒、クミだ。

教師が勝負の方法について説明する。

至って単純、正方形を2コくっ付けたバレーコートくらいの陣にそれぞれ前衛・後衛を配置し、後衛の後ろにあるゴールを守りつつ、相手のゴールにバレーボールを魔法等で叩き込むというもの。そう、魔法等。ここ大事。3点先取が勝利条件だ。

ゴールは大きめのHのような形状で、バーより上を通さないと得点とならない。バーはジャンプして手を伸ばしても届かない位置にあるから必然、止めようと思うと何らか策がいる。

注意事項は力学・心理学系の魔法のみ用いるということ。熱力学系や光学系は発火したり凍傷になったりで危ないからということだが、オレたちの実力ではまずその系統の魔法を扱えない。また足を使ってはならない。

聞き終えた後、ミカは握りしめた拳を薄い胸にあてる。

「残る夏休みの自由をかけて、勝負しなさい」

教師を前にミカは憤まない。はあ、とひとつため息をついて、オレは無駄だと知りながらも説得を試みる。補習を受ける者同士、互いに叱咤激励しつつこの艱難辛苦を乗り越えるべきだ。オレはそう思う。そう伝えたが、

「ベンサムに曰く、最大多数の幸福です。4人が苦しむよりも、2人が救われる方が道徳に適っているのです」

クミが見かけによらないサディスティックさを発揮してオレの平和と博愛に満ちた提言を粉碎

する。というかそれお前らの不幸をオレたちが肩代わりしているだけだから！全体的な不幸の量減ってねーよ！

「うっさい！つべこべ言わず黙って負けとけ！」

ミカがびしっとオレの胸元を指さして高らかにのたまう。拒否すればもれなく不戦敗となって補習マシマシ、戦ったところで実力差を考えれば負けは確実。ここはもう覚悟を決めて、不退転の決意をもって多少でも補習を減らすべく抗うほか道はない。

悲壮な覚悟を決めて、オレたちは配置につく。……そういやコウ、なんでさっきから一言もしゃべってないんだろうな。

「もう一度言うわ。大人しくコールド負けしなさい」

ボールを持ったミカが不敵に笑う。返り討ちにしてやるよと意気込んだことを尝试してみるが虚勢も良いとこでオレたちのカモられ率を鑑みればどうあがいてもミカの発言通りに状態が展開しないはずがない。照りつける日差し、炎天下、笛が鳴って、スタートだ。

「クド・コウ！！意のままに、跳ね回れ！《力学・補助系反発操作》」

開始言葉を発してミカが詠唱し、放物線ではなく直線の飛跡を描く豪速球ボールを投げてくる。相変わらずすごい威力だ。だがこれ、魔法の効果じゃない。それもそのはず《反発操作》は文字通り反発係数を操る魔法で、足で蹴ったり、ゴルフでスイングする時のような衝撃によるエネルギーの伝達を補助する。あの華奢な体のどこにそんなパワーがあるのか魔法並みに不思議なのだが、目眩のしそうな日差しと気温の中、手で投げたボールがコントロールよろしくぶっ飛んで行くのはコンクリートジャングル産ゴリラと称されるミカの自力に他ならない。

ボールはあっという間にオレの魔法範囲を超え、ゴールに向かって突き進んで行く。おいコウ！出番だ！コウ！……コウ！？

まさか、さっきのアニメのことを…。

ピリリィー、得点。

「うおおおおおおおい！！」

「あれ？何かあったの？」

何か！何か！あったに決まってるだろ！！お前はどこの時空を生きてたらさっきまでの流れ全部無視して今しがたここに召還されました的な小ボケ顔でたたずんでいられるんだと言いたいところだがいやわかる、わかるよお前は魂だけ二次元に降格させて体をオートパイロットさせてたんだろ。そうなんだろ！？

ハイタッチする女子たちを尻目に、オレたちはただただ不毛な醜態という茶番を演じ続ける。笛が鳴って、こちらのボール。男女なんちゃらも紳士的な振る舞いも魔法も何も関係ねえこっちも力づくで叩き込んでやるぜうおおおおお！

「クド・コウ。時の流れに、あなたは置いて行かれる《心理学系感覚遅延》」

「ふがっ！」

クミの詠唱を聞きながら、オレの顔面に放すタイミングが遅れ地面に叩き付けられたボールが跳ね返ってぶつかる。普段ならどうってこと無いが、朦朧とする日差しの中、ただでさえ思考がビミョウなときに心理学系の魔法は靦面に効く。効くったら効く。後衛のコウが補助してくれないのも効くったら効く。

ペナルティ。相手のボール。

代わり映えのない詠唱からミカの豪速球がまたも飛んでくるが、実はこれ、単純で対処しやすいように見えてオレたちのレベルだとぶっちゃけほとんど防ぎようがない。風を起こせないから、力学・補助系をうまく使って飛び上がり体をぶつけて物理的に防御するくらいしか策はないのだが(その場合の身体的ダメージは致し方ない犠牲だ)、オレたちはどちらもその方面は疎かった。ただ、だが。我らがコウくんには、他の誰もなし得ない究極の魔法がある。

「ク****ニ！！《特殊系運動量変換》」

未だに原理が不明で、系統分類できていない類い稀な魔法。世界中で数十人しか使えないというこの魔法を、コウは使えるのだ。

運動量ベクトルを反転させて豪速球をそのまま跳ね返すというどっかの誰かさんの能力と丸被りなチート魔法だが、まあ、結果は見えている。

「ギャン！！」

ものすっつごく間抜けな叫びとともにコウが倒れ、少し軌道を変えられたボールはしかしながらそのままゴールへ。“魔法により引き起こされた現象に、魔法で干渉すると暴走する”という一番最初に習う第一排他律をコウはいつまでたっても、何べん痛い目見ても、学習しない。自力でボールを飛ばせる自律機動兵器ゴリ……ミカがわざわざ魔法を詠唱する理由はここにある。

結果、2-0で後衛が倒れたので決着。普段なら最初に同じことをやってコウが倒れるから1-0、もしくは奇跡的にボールの軌道がずれて0-0で済むのだが、今日はさんざんだった。目を回しているコウの隣、校舎軒下の日陰に座ったオレはがっくり肩を落とすほかなかった。

三步進んで.....。

「なんということでしょう」
ふざけるな。そりゃこっちの台詞だ。

審判役をやっていた教師に散々足りない点やら補強メニューの日程やらを聞かされ続けオレたちの自由を毛頭配慮しないウルトラ補習スケジュールが完成する頃には日も暮れなずむ町、魔法都市も夏の夕日に照らされ風情ある景色を演出していたがもちろんオレにそんなものを愛でていられるほどの精神力ゲージの残りはない。寮まで2分の道のりもいまや天竺への道のりに匹敵し、この不毛なシルクロードの先にある東の間のオアシスだけがオレの足を動かす原動力だというのに、我が相棒といえ बातって涼しい顔で某リフォーム番組のナレーションのごとくさも感動したかのような『なんということでしょう』を数秒置きに繰り返している。想像してくれ。それがどれほどこの道を歩くオレの心に乾いた風を吹かせ荒ませて行くかを。

だいたい魔法都市なんてファンタスティックでロマンティックな名前にこの町の景色はそぐわないんだよ。あるのは学生寮とか教師・教授連中の平屋だけ。あとスーパーとかホームセンとか。小学校を除いてもたまにある箱モノは5~6階位の高さしかないしそういうのは大学の建物。近未来的な高層ビルもなければありがちなモノレールも無く、かといって蛍のように発光しながらふわふわ思うまま飛行する葉っぱタクシーとか杖をふる魔法使いとか箒にまたがって飛ぶ婆ちゃんも出てこないまあいわゆる普通の住宅街といってしまえばそれまでで、それで向こうの方に東京の高層ビル群が見えたりするんだからここは都市の名を冠する巨大な収容所といえなくもなかった。

「なあ、もうちょい深刻になってくれよ。お先真っ暗なんだぜ」
疲れきったオレは相手するのも面倒という感じでコウの『なんということでしょう』リピーティングに反応したが、ヤツは、

「お先真っ暗なら今を楽しまないと。ほらほら明るい方が見えてくる」
などともなげに言っただけやがる。確かに一理あるといえなくもないしオレも多分そう言う能天気な思考をした方が良いでしょうかとも思ったところで今の状況に至った経緯に思っていたとそれは現実逃避というものであり、進んだように見えて退行しているというのだ。

2階建てアパートの階段を登り、202と書かれたプレートのあるドアの鍵を差し込み、開ける。コウは隣の201号室にいつ鍵を開けたのかも分からない、むしろ鍵をかけてこなかったんじゃないというくらい目にも止まらぬ早さで吸い込まれて行った。

未来に絶望するより、今を楽しんでいれば、自ずとひらけてくる、か。
頭上、ゴォーという音がする。この時間になると毎日のように上空を飛んで行く、外国の偵察機を見上げながら、オレは頭の中で呟いた。